

諦 崇 寺 報

発行 諦 崇 寺
編集 藤 井 崇 文
〒631-0065
奈良市鳥見町
2丁目28-10
0742(37)2569
www.rittouji.jp



お焼香

お焼香の作法を尋ねられます。
「三回するのではないのですか。」
「という質問もありますが、私は
他宗派の作法を知りませんが、宗派を超えてはお参り出来ません。
曹洞宗の作法をご案内します。」

作法

- 一、香炉の正面に至って、両手を合わせて礼拝する。
- 二、右手(親指・人差し指・中指)でお香を取り、左手を添えて額の前で戴く。
- 三、お香を灰の上に焚く。(左手はこの時、片手で合掌の形を造るのが良い。)
- 四、(左手は片手合掌をしたまま)再び右手でお香を少し取り、今度は直接、灰の上に焚く。
- 五、両手を合わせて礼拝する。



片手合掌

一度目に焚くお香を「主香」、二度目に焚くお香を「従香」と呼びます。一度目に焚いた「主香」が消えないうちに「従香」を添えます。ですから「従香」は「主香」よりも少なめで、何人も連なってお焼香される時には省略しても構いません。

お焼香は、途切れない様に行う事が大切です。

僧侶が連なってお焼香する場合「前の人が横すれして最後の礼拝」をして、それと同時に「次の人が前に進んで最初の礼拝」をします。こつとして次々とお焼香します。

僧侶の作法を基本としますと、在家の方であれば、「前の方が席に戻ってから次の方が席を立つ」ではあまりに間延びします。で、次にお焼香される方は、前にお焼香される方の数歩後(ご)で待つ様にして下さい。

また、お焼香の前後に、「お香を拝借します。」「やお焼香させて頂きます。」「の意味を込めて、お導師さまやお施主さまにお辞儀をする場合もありますが、前の方がお焼香をされている間にお辞儀をして下さい。多くの方がお焼香をされる場合、「前の方が終わりのお辞儀をして…次の方が始めのお辞儀をして…」では時間ばかり掛かります。お身内だけの法事などは、お辞儀をされなくても構わないと思えます。

お数珠をお持ちの場合、左手首に掛けるか、左手の中指に掛けて下さい。

最近あまりの見かけませんが、「お香を拝借します。」の意味で、幾らかの硬貨(焼香銭)をお香の入れ物の横に置く習慣もあります。

とにかく、始めに示した四つの作法を、真心を込めて丁寧にして下さい。それ以外に気を取られて、肝心の「お焼香」を慌てたままのお気持ちでしてしまつては、本来ではありませぬ。

仏教は原理主義ではいけないので、「間違つたら何が何でもダメ」ではありませんが、作法はつまり「スマートに気持ちを表す方法」なので、大切に頂ければと思つます。

「焼香」の儀

戒香 定香 解脱香
光明 雲台 遍法界
供養 十方 無量 仏・宝 僧
見聞 普 熏 証 寂 滅

@taisouji

— ツイッターより —

檀家さん「近ごろ町内の回覧で訃報がよく届きますが、やっぱり寒いと亡くなる方は多いですか?」「私「そんな事ないですよ。一年中、人は生まれて亡くなられます。訃報しか回らないから、そう感じるだけです。赤ちゃんが生まれたらというお知らせも回覧したら面白いですね。」

ある僧「達磨大師がインドから中国へ渡ったその意味は、石頭希遷禪師「近くの柱にでも誤つてみなさい。」僧「私には何の事か分かりません。」「禪師「私にも分かりません。」「…理解したい様に理解しては行けないという教えですが、お洒落な問答ですね。」

私たちの考える正義は九九%は正しいがゆえに、1%の誤りに気が付かず自分や他者を傷付けます。自分の考えや正義、それは完全ではないと認めることが信仰だと思います。六七回目の広島原爆、仏さま・ご先祖さまの思いに込める私たちがどうか、と手を合わせて尋ねます。

(たごえは)実家と離れてお住まいのお子様で、お父様の法事なのに準備はお母様に任せっきりで、直前に到着される方がたまにおられます。忙しかったり、お孫様連れだったり事情がありでしようが、「拝む」と「祀る」は随分違います。お家のお仏壇は、離れていても「祀る」気持ちが大切だと考えます。

先週の報道ステーションで「ノンテアター」の方が「お任せ民主主義ではいけない。」と仰っていました。仏教や信仰も手間がかかりますが「お任せ」ではいけません。

分かり易さを求める世相ですが、分かり易さと引き換えに「自分が考えるべき大切な事を明け渡してしまう」危なさに気付く必要があらまふね。

「たごえのために」ことを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠っているのである。牛飼いが他人の牛を数えているように。かれは修行者の部類には入らない。「ブツダの真理のことは・感興のことは」(岩波文庫)

お坊さんは人に何か教えるのが務めで、私はその何かを持ち合わせているだろうか、とずっと自問しています。最近になって、仏教的知識は多少詳しいつもりだけれども、それ以上に檀家さんに教えられ、育てられている事に気がきました。そういう意味でお坊さんは有り難い勤めだと思つています。

南直哉著 『恐山・死者のいる場所』(新潮新書、二〇一二年四月)「むしろ問題は生者の側にあります。他者や自分の存在感が希薄になっている。死者供養の形骸化は生者が軽く扱われていることと並行して考えべき。生者の意味が薄くなっているから、死者の意味も薄くなっている。」(要約)

「宗教者の素質は、特殊能力を持つ事ではなく、自分が生きていく、存在する事に対する根源的な不安。人々の苦しみを共感するには、答えを『持たない』切なさ、『不安のセンス』が必要。」「…言語化できなかった私の思いです。金原東英老師が「迷えば良いじゃないか。」と仰つたのを思い出します。

谷川俊太郎さん「対象とする読者は三歳から一〇〇歳までと言っています。最近はお歳まで下りようとしていますが、私は僧侶として年齢関係なく幅広く伝わる、そんなお話を目指しています。やっぱり谷川さんは大好きな方です。負けないうちに頑張ります!」